

「我身にたどる姫君」注解(二)

武原弘
宮田尚
守屋省吾

〔本文〕

かくいふは、をとほ山のふもとなり。せきいるゝ水のをとほりむせびて、ともする松の風だにうづもるゝ雪おれに、いとどしくしづかなる世のけしきに、宰相の君の、さらぬわかれいとどとりそへ、うちなかれぬ。

雪ふりてくれ行としのかずごとにむかしのとをくなるぞかなしき
とひとりごつも、おりからはあれなり。女君、

すぎにけるむかしのさらにかへりこばくれゆくとしもうれしからまし
との給に、かごとがましき涙ぞあはれなる。侍従は又、そこはかとなく、つくしのかたおもひやらるゝなるべし。

おもひやるいきの松ばらたちかへりいつかあひみる春はあるべき
心をやりていひかはすもおかし。たれもかりそめによりふし給へるまゝにて、あけゆくかねのをともほのかにきこゆ。

〔語釈〕

○をとほ山の〓「をとほ山」は、都から近江に向う途中にある山。従つて、比叡山登下道にも近接している。○せきいるゝ水の〓拾遺集卷第八・雑上、伊勢「音羽河せき入れて落とすたぎつせに人の心も見えもするかな」○こほりむせびて〓堰水が氷

結して流れがとどこおり、むせぶような音をたてる。○ともとする松の風だにうづもるゝ雪おれに〓和歌的発想を感じさせるが、的確な引歌の例証を見ない。従って正解を得ない。「ともとする松」、すなわち松を友とみたる発想は「我園の岡辺に立てる一松を友とみつとも老にける哉」（山家集）、「小倉山松を昔の友と見ていくとせおいのよをおくるらむ」（玉葉集、為家）等多々ある。ここは「友と見し松さへ見えず埋もれぬ軒端の山の雪の夕暮」（王二集）に語句の類似が見い出されるが、この歌を頭に置いての記述であろうか。仮に、深山の幽谷に日々をすごしつゝ常に友としている松の枝も降りうずむ雪に折れて、いつもは枝を渡る風の音さえもせず、と解しておく。○宰相の君〓先に「なにがしの宰相のむすめ、おやなどなくて……」とあり、姫君の侍女としてひきとられた女。「宰相」は、父の官名によった呼称。○さらぬわかれ〓死別のこと。先に「おやなどなくて……」とあり、両親との死別をいう。古今集卷第十七雑上の業平とその母の贈答歌「老いぬればさらぬ別もありといへば愈々見まほしき君かな かへし 世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと歎く人の子のため」による。宰相の君が両親に死別したのは、雪の多い冬のことであったのであろう。○侍従〓姫君の侍女。筑前守の女、母の弁の君。○つくしのかたおもひやらるゝなるべし〓注解(一)で、父母が筑前国に下向し、さらに侍従の姉なる少将も肥前守と結婚し任国に下向している。従って、侍従は筑紫の方に心を馳せるのである。○「おもひやる」の歌〓「いきの松原」は注解(一)参照。後拾遺集卷第十九、雑五(一一二九)に、源重之の「一条院の御時大貳佐理筑紫に侍りけるに御手本かき下し遣はしたりければ思ふ心かきて奉らむとてかきつくべき歌とて詠ませ侍りけるに詠める」との詞書をもった「都へといきの松原いきかへり君が千年にあはむとすらむ」と同じ発想。○心をやりて〓憂き晴らしに。

〔通釈〕

このような話は音羽山の麓のことである。せき入れてある水の流れもこおりついてむせぶような音を立て、人里離れた山ふところとて、常の友としている庵の周囲の松も降りうずむ雪に折れて、いつもは枝を吹き渡る風の音さへもせず、ひどく静やかなあたりの光景に、宰相の君は両親との死別の悲しさまでとり添えて自然と泣かれるのであった。

雪ふりてくれ行としのかずごとくにむかしのとをくなるぞかなしき

今年もすでに年の瀬になり、雪が降る(古る)その古くなるごとく、父母の思い出もいよいよ遠い過去のものとなるのはなんとも悲しいことだ。

と宰相の君がひとりごとのように口ずさむのも時節からあわれである。女君は、

すぎにけるむかしのさらにかへりこばくれゆくとしもうれしからまし

過ぎ去った昔、その昔が改めて今に戻ってくるものならば、暮れ行かんとしている年もかえつてうれしいことであろうに。

「我身にたどる姫君」注解(一)

と言われるにつけても、恨みがましい涙は衰れである。また侍従は侍従で、なんとなく筑紫の方へ自然と思いを馳せるようである。

おもひやるいきの松ばらたちかへりいつかあひみる春はあるべき

遠い筑紫に滞在中の両親、姉ともども部に帰り、また会うことのできる春はいつくるのであろうか。

たがいにうさばらしのように詠い合うのもなかなか趣がある。皆仮寝のようにして寄り合つて臥したまへ、明け方のほのかな鐘の音も聞こえるのであった。

〔余説〕

ここに初めて、物語の発端としての場所が提示される。宰相の、主人公姫君、侍従と三人ともに、理由の違いこそあれ、各々心の晴れやらぬ情況におかれてゐるのを並列的に述べており、この物語の特徴である登場人物の非集約化の一端が、この小部分にも現われている。

なお、「ともとする松の風……世の中のけしきに」を、吹く風に和して音をたて、常に友としてゐる松の枝さえ、降りうずむ雪に折れて、その音があたりの静寂を時ならず破り、それがまた一層静寂さを際立たせる……と解し、静のなかに、動を配置することによって、静を強調してゐることもできようか。

〔本文〕

いみじう夜ぶかき雪のけはひ、あらましき風のけはひに、れいならず人のけはひして、うちたゞく也。「たそ」などいふなれば、「たゞいみじき雪のほど、このかどのかげばかり、かさやどりせん」とあけさせて、人々あまたくつのをとしてたちさまよふなるべし。かばかりふかき雪に、たれならんと、ことこのまじうするわかうどゞもは、かいまみさはぐべし。侍従も、心げさうとかおこなへけれど、おほきなる火とりにたき物をきて、とぐちにあふぎるたり。いたうくもりたれど雪にふりあひておかしき程の月かげに、すのこもみなうづもれにければ、わづかなるはなちいでのとのもによりぬ給へる、なべての人とはみえず、いみじうめでたきを、雪氷にとちられたる心ちには、きえかへりめづらかなりと思ふべし。又おさなきわらはたどりきて、「あなたに人のいひ侍つるは、三位中将殿とぞ申す」といふなり。「あなかま」と、てかゝれて、「よな、きさいの

宮の御なやみをもしとて、御つかひに山にのぼり給へりけるが、よをこめていそぎかへり給ふなる」といふにも、すゞろにむねつぶるゝぞあひなきや。いづれの宮ならんときゝ給に、これは中宮におはすべし。あまうへも、「はづかしきあたりを、よいなく」とわび給。やうゝあけ行空のけしきに、雪もすこしふりやみぬ。れいのとぐちによりおはして、「うれしきみちのたよりに、かうさぶらひそめぬれば、かならずことさらになん、このかしこまりもきこゆべき」などの給。つたへきこえんに、かたはらいたき御程なれば、あまうへぞ、すゞひきならしてゐざりいで給ふ。

「人とはぬいほのかげちの雪のうちにならぬ月のかげを見るかな

いともかしこきに、うけたまはりおどろき侍つるを、たづね御らんぜらるゝもやさしかるべきいほりのさまに侍れど、うちつけにやまちきこえさすべからん」などぞ、いたうふりたれど、さるかたにゆへある御けはひなる。かしこまり給ふけぢめみせて、

「あかなくにいでぞやられぬいにしへのなぐりとまれり庭の月影

わざとかずまへおぼしめさるべきかたを侍らんを、をのづからそのことゝ侍らぬには、たゆみすこし侍にける」など、さまよくとなりし給ふ。

〔語釈〕

○かさやどり〓軒下、木陰などで雨宿りをする事。○ことこのまじうするわかうどゞもは〓物好きな年若い女房たちは。「わかうどゞも」は、姫君の女房たちを言う。○かいまみさはぐべし〓物の透き間からこつそりのぞき見をして大騒ぎしているようである。○心げさうとかおこなへけれど〓本文は「けれど」と逆接になっているが、下文への続きからすると「ければ」と順接にしたいところ。急の来客のために心の用意とかをするが。○火とり〓香炉のこと。香をたくのに用いる。外側は木、内側は銅や陶器で、上を銅の籠でおおう。○とぐちにあふぎるたり〓来客のためにとり急ぎわからないように香を薫く、いわゆる空薫きをする。○いたうくもりたれど雪にふりあひておかしき程の月かげに〓ひとく曇ってはいるが、降り積った雪の白さが風情を添えている淡い月の光に。下文「なべての人とは見えず」に続く。○すのこもみなうづもれにければ〓簀子にも雪が降り積っていたので。ここは挿入句。○わづかなるはなちいでのとものもとにより給へる〓少しばかりの

はなちいで戸の近くに寄り添っている人。「はなちいで」は、母屋より続けて建て出してある屋。「ゐる給へる」の下に「人が省略されている。○なべての人とはみえず普通通の身分の人とは思えない。○雪氷にとぢられたる心には「こんな山深い住いで雪や氷に閉じ込められている気持には。こは主語が誰か特に考える必要もないが、下文「きえかへりめづらかなりと思ふべし」とあるところから、女房たちを主体としての記述であろう。○きえかへりめづらかなりと思ふべし死ぬほど珍らしいと思ふにちがいない。○おさなきわらは「尼上のところで使役している雑役の童であろう。○てかゝれて「てかく」（手掻く）は、手で掻く様子をいうことから転じて、手でさし示して制止することをいう。源氏夕顔「あなかまとてかくものから」○よな「人に呼びかけて物事を注意させる感動詞。今の「ねえ……」にあたる。○御なやみ「御病氣。○御つかひに山にのぼり給へりけるが「御病氣平癒の祈願のため御使いとして比叡山におのぼりになられて。「山」は比叡山を言う。○よをこめていそぎかへり給ふなる「夜つびいて都にお帰りになるその途中だということ。」「なる」は伝聞。○すゞるにむねつぶるゝぞあひなきや「思いがけずはつと心驚くのは、どうもぞつとしないことである。「むねつぶ」れたのは、前文の童のことばのなかに「きさいの宮の御なやみをもしとて」によつてである。后宮の病を耳にして急に心配することから、この主語は尼上。作者は后宮と尼上が因縁浅からぬものがあることを暗示している。病氣であるのは中宮であつて、皇后ではないことが下文で判明する。○はづかしきあたりを、よいいなく「氣恥しいこのような寓居をお訪ねいたゞきました」が、お迎え申し上げる準備とてなくて……。○わび給「困惑なさっている。○れいのとぐち「前文に「侍従も、心げさうとかおこなへけれど、おほきなる火とりにたき物をきて、とぐちにあふぎぬたり」とあるその戸口。○うれしきみちのたよりに「雪に降りこめられた途次にうれしくもかさやどりさせていたゞきましたそのきつかけで。○かうさぶらひそめぬれば「このようにおそばに控え初めましたので。「さぶらひ」は尼上に対する謙讓の氣持を表わした表現で、訪れ初めたことをいう。○このかしこまりもきこゆべき「このお礼も申し上げに参ります。○つたへきこえんに、かたはらいたゞき御程なれば「侍女を介してお話し申し上げるのも、どうかと思われるほど三位中将は身分の高い方であるから。「御程」は三位中将の身分をいう。○「人とはぬ……」の歌「尼上の歌。「いはのかげぢの雪のうち」は山深い尼上の寓居を、「月のかげ」は三位中将を象徴的に表現したもので。なお「月」は「日」（帝）に対して「后」を象徴することから、「月かげ」は「后」にゆかりのある者として表現したと考えることもできる。後に判明するが、中宮は三位中将の叔母にあたる。○いとまかしこきに「大層恐れ多いことですが。○うけたまはりおどろき侍りつるを「あなた様がお訪ね下さったことをうかがい驚いております。○たづね御らんぜらるゝもやさしかるべきいほりのさまに侍れど「またお訪ねいたゞくにつけても、お気づいか

いたゞくような庵の様でもございませぬが。○うちつけにやまちきこえさすべからん||当方といたしましては軽々しい気持でお待ち申し上げましようか。○いたうふりたれど||大変古風ではあるが。○さるかたにゆへある御けはひなる||それはそれとしてこの尼上は由緒ありげなご様子である。○かしこまり給ふけぢめみせて||かしこまって容儀に変動をお示しになられて。「けぢめ」は区別、變動の意。尼上に敬意をはらつて威儀を正したのである。源氏野分「御さき追ふ声のしければ、打ち解けなえはめる姿に、小桂ひきおとしてけぢめ見せたる、いといたし」。○「あかなく」の歌||「いにしへのなごり」とまれる庭の月影」は尼上を象徴化している。従つて、三位中将は尼上の身の上を知つていて、この歌を発想している。こども「月影」といつているから、「后」になんらかのゆかりを尼上が持つていると見做し得ることは三位中将の歌と同様である。ここでいう「后」は中宮でなくして皇后であることが後に判明する。○をのづからそのことゝ侍らぬには||自然とこれという用事もないものですから。「をのづから」は下文「たゆみすごし侍りける」にかかる。○たゆみすごし侍りける||ご気嫌うかがいも慥意しておりました。

〔通釈〕

大層夜も更けて、戸外は雪もよいに加えて荒々しい風が吹いている、そんな中をこの山深い音羽山の庵にも普段と違つて、人の来訪の気配がして戸をたゞくようである。「今頃誰でしょう」などとしようと、「ひどく雪が降つております故、門の下でも結構です。しばらく雪をさげさせていたゞきとございます」といつて門を開けさせて、足音からして大勢の人らしく門のあたりに立ちさまよつていゝ様子である。これほど深い雪の夜に、誰であろうかと、好事の若い女房たちは物蔭からのぞき見して騒いでいるようである。侍従も、いまだ年若い人のこととて、すっかり緊張して大きな香炉に薫物をのせて戸口で空薫きをしている。ひどく曇つてはいるが降りうずんだ雪の白さが、風情を添えている淡い月の光の中に、簀子のあたりもすべて雪が積つてしまつていゝから、わずかばかりつき出している庇の戸の側に寄つておられる方は、普通の身分の人とは思えず、大変立派であるにつけても、山深い雪や氷に閉じ込められて日々を送つていゝ若い女房にとつては、気もそぞろになるほど珍らしく思われるに違ひない。雑役の小童べがやつて来て、「あちらで話しているのを聞くところによりますと、三位中将様だということとです」といふ。「静かに」と、制止させられて、小童べは声を低めて、「后宮様の御病気が重いと、こととで、比叡山にお登りになられて、夜を徹してお帰りになられる、その途中とかいふこととです」といつにつけても、尼上はドキンと驚かれるのは、どうも詮ないことである。御病氣になられたのは中宮か皇后かどちらかと尋ねたところ、中宮でいらつしやら

れるようである。尼上も、「このような気恥しい住いにご訪来下さいまして、いたみ入っております。前もつての準備とてなにもできず……」と困惑なさっている。空の景色にも夜が明ける気配が感じられて、雪も小降りになった。三位中将は、先ほどの戸口に近寄り、「雪に降りこめられた途次に、うれしくもかさやどりさせていただきましたきっかけて、このようにお邪魔し始めましたので必ず改めてお礼申し上げます」などとおっしゃる。尼上は、女房などを介してお話し申し上げるには三位中将は気のひけるほどの御身分であるから、数珠をならしながら戸口の近くに膝行してお出になる。

「人とはぬいのはかけちの雪のうちにはぬ月のかげを見るかな

誰一人として訪れる者もない岩間の険しい道の雪の中を、珍らしくもあなた様はお訪ね下さったのですね。

大変恐れ多いことですが、あなた様のご来訪のことを耳にし驚いております。またお訪ねいただくにもお気づかいたさうな庵の様ではございませんが、私といたしましてはどうしてあなた様を軽々しい気持でお待ち申し上げますか」と、ひどく古風ではあるが、それはそれとして由緒あるご様子である。三位中将は畏敬して威儀を正して、

「あかなくいでぞやられぬいにしへのなぐりとまれる庭の月影

まだ名残り惜しくてここを出立する気にもなれません。かつてむつまじかるべき縁者であられたあなた様にお目にかかったものだから。

私のごとき者は、あなた様に人並みの者としてお覚えいたさける筈もございませんが、これという用件もなかったものですから、自然とご気嫌伺いにも懈怠してすごしております」などと、体裁よくとりつくろいなさる。

〔余説〕

ここに、新たに三位中将なる人物が登場する。作者はそれと明示はしないが、三位中将と中宮、尼上と皇后、三位中将と尼上などが、なんらかの縁に結ばれていることを暗示している。従って上記の四者全部がいずれとはわからぬが絆で結ばれていることになる。本文の記述態度は、再三にわたって「なる」という伝聞を使用しているが、作者の眼、いわゆる超越的視点からは、このような記述態度はとれない。作者はこの段において、尼上を中心として記述している。舎屋の奥に居る尼上が、戸の内外のざわめきを耳にするという形で「なる」を使用しているものと思われる。

〔本文〕

このあまうへは、宮の中納言ときこえしうへになん。その中納言の御いもうとこそは、この中将の御は、ものし給へば、わざとむつまじき御なからひなるべきを、中納言はむかしかくれ給にしのち、世をそむき、あるにもあらぬさまにてかくろへすぐし給うちにも、御はかられいけいでんの女御ときこえし、とりわき御な

かうるはしうおぼしかはしたりし、いまの皇后宮の御は、に物し給ふ。うせ給にしのは、宮にもたゞこのあまうへを、いとむつまじき物におもひきこえ給へる御ゆかり、関白殿ときこゆるは中宮の御はらからにものし給へば、わざとそねむ御心ならねど、なまはづかしきにより、かの北のかたにもえきこえかはし給はず、おほかた世をのがれはなれ給にしかば、かすかにおこなひ入てすぐし給なりけり。

〔語釈〕

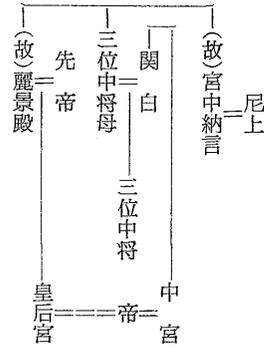
○わざとむつまじき御なからひなるべきを〓（尼上と三位中将の母上とは）特に仲睦まじい筈の御関係であるのに。○世をそむき〓（尼上が）出家遁世して。○あるにもあらぬさまにてかくろへすぐし給うちにも〓この世にありながら、まったく世間との交わりを絶つて隠棲なさっているうちにも。○御はらかられいけいでんの女御〓宮の中納言の御兄妹であられる麗景殿女御。○とりわき御なかうるはしうおぼしかはしたりし〓（尼上と麗景殿とは）特にお仲がよくたがいに思いかわしていた。この句は挿入句。○うせ給にしのは〓（麗景殿が）薨去なされて後は。○宮〓皇后宮。○いとむつまじき物におもひきこえ給へる御ゆかり〓大姿親昵な人としてお思い申し上げていらつしやられた御関係で。○わざとそねむ御心ならねど〓（尼上は）とりたててそねむというお気持ではないが。○なまはづかしきにより〓なんとなく気がおかれるから。○かの北の方にもえきこえかはし給はず〓あの北の方（関白北の方、三位中将の母上）とは親しい交際もなさらず。

〔通釈〕

さてこの尼上は、かつて宮中納言と申し上げた方の北の方であった。この中納言の御妹様こそが、三位中将の御母上でいらつしやられたから、尼上と三位中将の御母上とは特に親昵である筈の御仲であるが、その昔中納言がお亡くなりになってからは、尼上は世俗の関係をたち、ひっそりと隠棲なさってしまった。そんな生活の中でも、とりわけ故中納言の御兄妹であられる麗景殿の女御と申し上げた方——この方は尼上とことのはか親昵のお仲らいであられたが——は、今の皇后宮の御生母であられた。麗景殿の女御が薨去なされてからというものは、皇后宮におかれてはただこの尼上を大層睦まじい人としてお頼りになっていらつしやる関係上、関白殿と申し上げる方は中宮の御兄であられる故、尼上はとりたててそねむというお気持ではないが、なんとなく気が置かれるので関白北の方（三位中将母）とも交流なさらず、総じてこの世を離れて出家してしまわれたので、人げもない有様で専心勤行にあげられておられるのであった。

〔余説〕

今、この段の叙述を整理して系図に示すと左のごとくになる。



すなわち系図のごとく、尼上と三位中将母（関白北の方）、麗景殿は義姉妹の關係にある。従つて尼上とは兩者とも仲睦まじかるべき間柄である。しかし三位中将母の夫関白は中宮と兄妹であり、三位中将母と中宮は義姉妹であり、一方麗景殿在世中は尼上とことこのほか親昵の仲であつて、今の皇后宮は麗景殿を御生母としている故に尼上の力も自然と皇后宮に注がれるという結果になり、中宮・皇后兩立という情況下にあつては、どうしても三位中将母をなまはずかしい気のおける方として尼上は見なければならなかつたのである。

いうまでもなく、三位中将にとつて、尼上は義理の叔母である。ともあれ、作者は、ここに至つてはじめて読者に一括して人間關係を明らかにしたのである。だがわれらの主人公姫君の生い立ちについては、いまだなんらの具体的言及もない。

〔本文〕

うちのうへは、さまざままいりあつまり給ふ御方々、いまもく人は御らんぜまほしうのみいまめかせ給へど、まことの御心ざしかぎりなくときめかせ給事、皇后宮にならびきこえ給人しおはせねば、この御かたの木草まであはれをかけんとはならせ給へれど、世のならひおなじみこたちにて、とりたてたる御うしろみしおはせねば、いとくをしげなり。たゞかぎりなき御さまかたちばかりをたのみにて、故院のゆづりをきくこえ給ひしかば、かううごきなきさまにはさだまらせ給へれど、中宮の御おぼえ、やゝもせばいとくるしげなりしかど、そもちゝおとゞおはせでのちは、おほく人のくちさがなさもやすまるべし。いまの殿は、御心をきていみじうひろくうるはしうおはするなかに、皇后宮の御ためねんごろにありがたき御心は、うちのうへに猶すぎてなんおはしける。春宮もいかゞのみ、まだきにあつかひしかど、おとゞさらにおぼしかけず、さりきこえ給にしかば、一の宮さだまらせ給にしを、皇后宮は、かぎりなくうれしとおぼしためり。中宮は、むつま

しき御なからひながらも、故おとゞおはせましかば、かうすゞろなるうるはしきはたて給はざらましと、あぢきなくぞおぼしむすぼゝるべかりし。

〔語釈〕

○うちのうへは \parallel 帝は。下文「この御かたの木草まではれをかけんとはならせ給へれど」にかかる。○さま、ま、まいりあつまり給ふ御方 \searrow \parallel いろいろ大勢入内なされていく方々。「御方 \searrow 」は中宮、皇后をはじめとしてあまたの女御、更衣をいう。○いまも \searrow 人は御らんぜまほしうのみいまめかせ給へど \parallel 今の今も帝の御寵愛を得ようと当世風に振舞っていらつしやるが。○まことの御心ざしかりなくときめかせ給事 \parallel 帝の本當の御寵愛がこの上もなく時にあつて榮えているのは。○この御かた \parallel 皇后宮。○木草まではれをかけんとはならせ給へれど \parallel （皇后宮の）縁故者にまで御愛顧をかけようとするまじくなきついでいらつしやつたが。「木草」は縁者、関係者の意の象徴表現。「……ならせ給へれど」は、底本たる九条家旧蔵本では「……ならせ給へれば」になつてゐるが、こゝは、書陵部本によつて改めた。それの方が下文の続きがよい。○世のならひおなじみこたちにて \parallel 皇后腹の皇子たちとて慣例的なお取扱ひであつて。○とりたてたる御うしろみしおはせねば \parallel これといつてしかるべき後見もいらつしやらないから。皇后宮は故院と麗景殿との間に生まれてゐるが、すでに両親ともこの世を去つてゐる。○たゞかぎりなき御さまかたちばかりをたのみにて \parallel 皇后宮のこの上もない美しい御容貌をたゞ頼みとして。底本は「たゞかぎり御さまかたち……」とあるが、「なき」を書陵部本によつて補つた。○故院のゆづりをききこえ給ひしかば \parallel 父故院がかつて皇后宮を帝にお托し申し上げなされたので。こゝも底本は「故院のゆづりをきこえ給……」とあるが、書陵部本によつて本文のごとく改めた。○かううごきなさまにはさだまらせ給へれど \parallel 皇后宮といふこの上もない地位にお定まりになつたものの。○中宮の御おぼえ \parallel 中宮のご評判。○やゝもせばいとくるしげなりしかど \parallel やゝもすると気がかりなことであつたが。○そもちゝおとゞおはせでのちは \parallel それにしても中宮の父関白が薨去なされて後は。○おほく人のくちさがなさまやすまるべし \parallel 世間の口うるさいとり沙汰も大方なくなるようである。○いまの殿 \parallel 現在の関白。中宮の兄。三位中将の父。○御心をきていみじうひろくうるはしうおはするなかにも \parallel 御度量が大層広く立派でいらつしやられるが、なかんずく。○皇后宮の御ためねんごろにありがたき御心は \parallel 皇后宮に対して珍しい親切なお心は。闍闔政治にあつて、本物語の関白のごとき立場は、当然自分の身内である中宮を盛り立て、己が勢威の拡張を企図するのが普通であるが、逆にいわば競争相手である皇后に対して「ねんごろ」な心を持つてゐる。従つて「ありがたき御心」なのである。

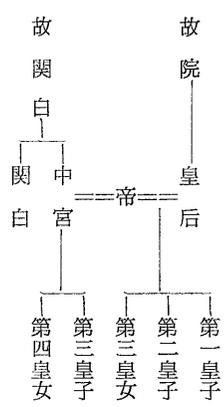
○春宮もいかゞとのみ〓春宮はどなたにお定まりになるのかと。「春宮もいかが定まらせたまはんとのみ」の省略表現。○さききこえ給にしかば〓春宮決定の懸案をおさけ申し上げたので。○一の宮〓皇后腹である。余説の系図参照。○中宮はむつまじき御ながらひながらも〓中宮と関白は兄妹のことゝて、睦ましい仲らいであるが。○かうすゝなるうるはしきはたて給はざらまし〓「うるはしき」は、ここではどうも釈然としない。「うるはし」は元来端正である、端麗であるの意であり、宣長が「玉小櫛」で「スベテうるはしトイフ言ハ、古書ニテハ、タダ美麗ノ意ナレドモ、物語ナドニイヘルハ、タダ美麗ノ意ニハアラデ、俗言ニ、キツシテカタイトイフ意、ミダレズ正シキニイヘリ」と言うがごとく、端正、端麗であるの意にしては、文意が通じない。「うれはしき」とありたいところ。仮に、このような思いがけない遺憾な処置はおとりにならなかつたであらう、と解しておく。

〔通 釈〕

帝は、様々と入内なさっている大勢の女御、更衣が今の今も御寵愛を得ようと当世風に振舞っていらつしやるが、誠の御寵愛がこの上もなく時にあつて榮えているのは、皇后宮に匹敵申し上げる方もおられないので、皇后宮の縁故者にまでご愛顧をかけようとへだてなくいらつしやつたが、所詮皇后腹の皇子たちとて、慣例的な処遇を一步も出るものではなく、これといつてしかるべき御後見もいらつしやらないので、大層気の毒である。皇后宮のこの上もない美しい御容貌をただ頼みとして、父故院が帝にお托し申し上げなかつたから、皇后という最高の地位にお定まりなかつたが、中宮の御評判がやゝもすると気がかりなことであつたが、それも中宮の父関白がおなくなりになつてからは、世の口さがなさも大方なくなるようであつた。現関白は、御度量が大変大きく御立派でいらつしやるが、なかんずく皇后宮に対する御親切な心は珍しいほどで、その心は帝にもまさっているほどであつた。春宮決定につき周囲ではどなたにお決まりになるのかと、早々と噂していたが、関白は全く無関心な様子で、自分の関係者から春宮に立つことを避けていらつしやつたので、第一皇子に決定したのを、皇后宮は至極よろこばれたようであつた。一方中宮は、兄関白とは睦まじい仲ではあつたが、故関白が御在世中ならば、決してこのような予想外な遺憾な処置はおとりにならなかつたであらうと、不快な気持で消沈しておられたに違いない。

〔余 説〕

本段をより理解をいただくべく、次段でも判明する人間関係を加えて、系図に示すと左のごとくである。



系図のごとく一般的には、春宮決定に關して絶対的發言權をもつのが関白であり、当然自分の身内、すなわち中宮腹の第三皇子を擁立する立場にありながらなぜか皇后腹の第一皇子の春宮決定を見て見ぬ態度をとっている。しかも、皇后宮に対する親切さは、帝を凌駕するほどという。この点、作者は伏線を置いているのであり、読者はこれをよく念頭に置いておかなければならない。

(昭和四十三年十一月)